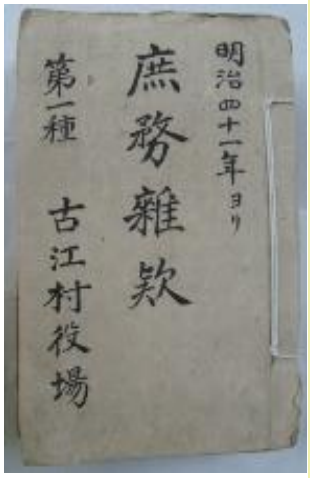
第1回　堀尾但馬の子孫・堀尾方善の後半生

松江城を築城した堀尾吉晴(1544～1611)の従弟に堀尾但馬(？～1644)という人物がいました。但馬は、寛永 15 年(1638)松平直政が出雲に入国すると松平家に仕え、堀尾氏が出雲を支配した時期の様子を伝える「堀尾古記」、「堀尾家記録」という貴重な史料を書き残しました。

今に伝わる「堀尾古記」は、外側に焼け焦げた跡が残っています。『島根縣史』には明治 36 年(1903)に松江市浜佐陀の満願寺で火災にあったとありますが、詳しいことはわかっていませんでした。史料編纂室ではいろいろな種類の史料を調査していますが、古い新聞や公民館にある史料を調べていく過程で明らかになった事情をお伝えしたいと思います。

但馬の子孫は松江藩士として松平家に仕え、方善(茂次)(1848～1911)の代に明治維新を迎えます。方善は、明治 22 年(1889)から満願寺の家僕になり、仏事ほか一切の庶務を引き受け、村民から「生仏様」と呼ばれ慕われていました。



明治 36 年の火災は、「山陰新聞」によると、村民の焚き火の残り火が寺の台所に延焼したものでした。この火災により、方善が所持していた家伝の文書のほとんどが失われたようです。幸いにして、「堀尾古記」は写真のような姿になりながらも、「堀尾家記録」とともに残りました。

方善は、明治 43 年(1910)頃に体調を崩し自宅療養を勧められたのですが、寺にとどまることを望みます。寺では、実家からきた家族だけでなく彼の徳を慕う村民も交代で看護にあたりました。満願寺住職は、方善の永年の功績に対して褒賞を与えています。古江村からは忠僕上申書が島根県に提出され、明治 44 年 8 月、堀尾方善は八束郡の模範者として表彰を受けることになりました。

史料調査により、これまで知られることのなかった廃藩以降の堀尾方善の生活と彼が保管していた史料が被災した顛末がわかりました。今後も松江市の歴史に関わる多くの人々を紹介していきたいと思います。

(平成 22 年 10 月 1 日　文化財課史料編纂室　福井将介)

参考史料1　明治 36 年 1 月 6 日付「山陰新聞」3 面

浜佐陀万願寺の火事

昨日午前二時二十分八束郡古志村大字浜佐陀万願寺納屋の脇なる薪の積みある所より出火し終に庫裏（奥行四間桁行八間）に延焼し後廊下湯殿納屋（長四間巾二間）を焼失し家具は少々持出せしも大半焼失土蔵及本堂に異状なかりしか出火の原因は不明なり目下同寺住職長瀬学澄師は本庄村大通寺と兼務にて同寺に出勤中堀尾方善か留守を為し居りしに午前二時と覚しき頃ハツハツ音のするを聞き起出て見れは已に火焔の漲り居る始末に驚き非常鐘を乱打したるも人の集るまてに庫裏に延焼せしなりといふ

参考史料2　明治 44 年 8 月 6 日付「松陽新報」2 面

八束郡の表彰者（三）〔抜粋〕

　同郡古江村大字浜佐陀　堀尾　方善

嘉永元年正月二十五日生資性温厚品行端正にして義侠心に富み明治二十二年同所満願寺の僕となり爾来今日に到るまで二十有余年間極めて誠直に勤務せり元来満願寺は久しく他寺住職の兼務する所にして殆んど無住の姿なりしにより一意専心寺務の整理に当り就中金銭の出納に従事し曾て厘毫の錯誤を生じたることなく又山林の経営園圃の培養等粉骨砕身同寺の維持に努め毫も倦怠せしことなし洵に殊勝なりとす仍て金四円を授与して之を表彰す